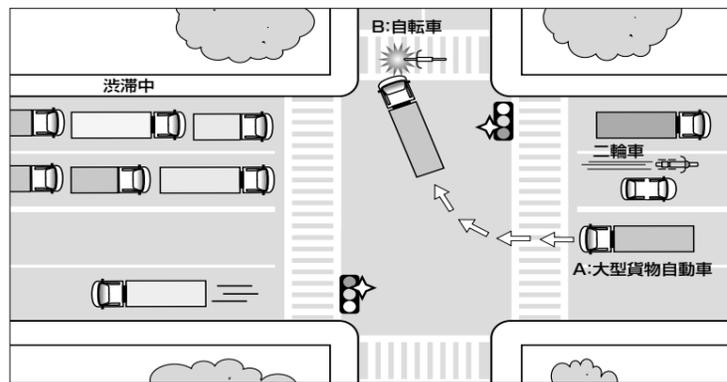


# 職場における交通安全指導

Part 84

## 大型車が右折する際、横断中の自転車に衝突



### ■事故の概要

- 発生日時  
日 時：平成22年3月某日 午後5時30分頃  
天 候：曇り
- 道路状況  
片側2車線の県道交差点
- 事故の当事者  
運転者A（大型貨物車）：61歳、男性  
被害者B（自転車乗用者）：36歳、女性  
被害者C（自転車同乗者）：3歳、男児
- 被害状況  
A：前部バンパー微損  
B：両手、頭部打撲（全治2週間）  
C：頭部打撲（全治3週間）

### 事故状況

Aは、運送業での乗務経験が30年になるベテランドライバーで、業務多忙な時は体の無理を押しつけて働いたこともあった。しかし、60歳を超えたころから疲労が蓄積するようになり、時折体調が優れないと感じることもあった。

永い間無事故運転を続け、一時は同僚から模範運転者と評価されていたが、ここ1年足らずのうちに2件の事故を起こしていた。

当日Aは、輸入雑貨の配送先が遠方であったため未明に会社を出発した。配送を終え、やや疲労を感じながら帰路についたが、対向車線での事故の影響で渋滞が発生し、片側2車線の第2車線を発進、停止を繰り返しながら走行していた。

事故発生場所である交差点近くに差し掛かった時、夕暮れ時で辺りの見通しは低下していたがまだ運転に支障がないと判断し、前照灯を点けないまま交差点に進入した。交差点内には渋滞の影響で停止車両があったため、その手前で停止し右折のタイミングを待った。

交差点内の停止車両が進み右折を始めると、直前を二輪車が高速で走り抜けたため驚き、対向車の動向にのみ気を奪われたまま右折を始めた。

横断歩道を通過する直前、右方から何か迫ってくる気配を感じ、咄嗟にブレーキを掛けたが間に合わず、Bが乗用する自転車に衝突、転倒させ、Bと同乗のCを負傷させた。

この事故の原因は、交差点で右折する際、渋滞中の車の陰から突然現れた二輪車に驚き、対向車の動向に気を奪われてしまい、前方注視を怠ったまま進行したため、横断歩道を渡っていたB乗用の自転車を見落とししたことである。また、Bも歩行者・自転車専用信号が点滅中であつたにもかかわらず、周囲の安全を確認せず交差点に進入したことも一因といえる。

### 安全指導

#### ① 心身の状態を良好に保つ

Aは運送業に就いてから大型車に乗務しているが、加齢に伴い心身の疲労を感じるようになり、

今回の事故を含め3件の事故を起しました。いずれも疲労から緊張感が薄れて、注意力が散漫になったことが事故の背景にありました。

事故の90%以上は、「人が原因」といわれています。運転者が油断をして注意を怠る「心のミス」です。車の運転で安全を確保するためには、適度な緊張感の保持と、ここぞという時の集中力、また、注意力の持続が欠かせません。

スポーツの世界では、インパクトの瞬間にフルに力が発揮できるよう、よく「脇を締めろ」（固める）といひます。車の運転についても同じようなことがいえます。

疲労感が強かったり、気持ちが緩んだりしていると、どうしても集中力がなくなり、注意力も低下してしまいます。

運転者は普段から体調を整え、心身の状態を良好に保つよう自己管理に努め、運転中は常に気持ちを引き締め、注意を怠らないよう心掛けましょう。

#### ② 危険を予測する運転

平成21年中の全国における対人事故発生状況を見ると、交差点での事故が48%を占めており、重大事故へと結びついています。

とりわけ交差点を右左折する際は、事故の危険要因が多く潜在することから、最大の注意を払い、慎重な運転が必要です。

事故当時は、右折の途中で突然現れた二輪車に進路を遮られたため、注意が偏ってしまい、衝突直前まで自転車の存在に気が付きませんでした。

一般的に、運転者であれば渋滞中の車の陰から二輪車が飛び出すような状況は、予測可能なことですが、Aが注意を怠ってしまったことは、交差点への危険意識、安全への配慮や見極めが甘かったといわざるを得ません。

運転者は加齢に伴って次第に認知ミスや判断ミス、反応の遅れが多くなります。特に交差点では自転車や歩行者を見落とす危険性が高まるため、まず、横断者の早期発見に努めることが鉄則です。

交差点で右左折する際は、「何が危険で、その危険をどう回避するか」など危険を予測し、自転車や歩行者の早期発見に努めるよう心掛けましょう。

#### ③ 自転車横断に注意

平成21年中の全国における自転車関連の対人事故

は156,373件発生し、事故全体の2割を占めています。なかでも交差点での発生が73%を占めており、その大半は、右左折時に発生しています。

Aは右折の際、対向車に眼を奪われ、安全確認が偏ったことが事故の原因となりましたが、Bも信号（歩行者・自転車専用信号）が点滅に変わったのを見て急いで交差点に進入し、前方だけに眼を向け、横断歩道を渡っている状況でした。

自転車の場合、二輪車と同様、停止時に車体を足で支えなければならないため、「走り続けたい」という意識が強く働き、その影響から信号の変わり目に横断歩道へ駆け込むなどの無理な走行もみられます。

平成21年7月から安全基準を満たした親子（6歳未満の幼児）3人乗り自転車が走行可能になりました。

手軽で利便性が高い乗り物として親子同乗の自転車利用が多いなかで、自転車事故が発生すると重大事故となる危険性が高いことから、運転者は今一度、対自転車事故の被害の重大性を認識し、注意を喚起することが重要です。



#### ④ 夕暮れ時の走行に注意

平成21年中の全国における死亡事故の発生状況を見ると、午後5時から7時までの夕暮れ時に事故が多く発生しています。この時間帯は、人や物が見えづらく、見落としや発見遅れなど運転者の認知ミスにつながりやすいため、より注意が必要です。

今回の事故の原因は、脇見による自転車の見落としですが、もしAが早めにライトを点灯していれば、Bも危険を察知し、回避できたと考えられます。しかしAは、夕暮れ時の危険を軽視したことで、ライトを点灯させませんでした。

事故原因の74%は認知ミスであり、夕暮れ時はそのリスクが一段と高まるため、運転者は視野を広くし、横断者など必要な情報の早期発見に努めることが肝要です。また、相手に自分の動きを知らせることも大切です。

夕暮れ時は、早めにライトを点灯し、安全確認を怠らないようにしましょう。